

二〇〇四年三月三〇日 法藏館刊  
『聖なるものの形と場』抜刷

チベットのポン教における聖なるものの形

森

雅秀

## チベットのボン教における聖なるものの形

森 雅秀

### 一 ポン教とは

チベットの歴史や文化に関心を持つものに、「ボン教」の名はチベット土着の宗教としてよく知られている。しかし、その教義や歴史、実践や美術などのくわしい内容について、明確な知識を有していることはきわめてまれである。シャーマニズムと混同されて、憑依や神降ろしの宗教として語られることもしばしばあるが、これは誤りである。

ボン教の寺院は、現在でもチベット本土を中心に、中国の青海省、四川省、ネパールの西北部などに点在し、僧侶たちが活動を続けている。チベット本土のボン教寺院は、チベット動乱と文化大革命によって大きな打撃を受けたが、近年、復興のきざしが見られる。寺院の活動は周辺に住むボン教の信者たちによっても支えられている。現在見ることできるこのようなボン教は、研究者によって「組織化されたボン教」と呼ばれ、教理や哲学、寺院組織、修行階梯などのさまざまな面において、仏教の影響が顕著に認められる。ボン教の信者はもとより僧侶でさえ、

仏教の一宗派としてボン教をとらえることもある。

これに対し、古代のチベットにおいて、仏教が伝来する以前に信奉されていたボン教は、まったく別の様相を持つ。<sup>1)</sup> 敦煌文献の中に見られるボン教は、死者の葬送儀礼と強く結びついていたことが、山口瑞鳳博士などによって明らかにされている。現在の「組織化されたボン教」に直接結びつくのは、仏教が伝来してからのボン教である。当時、弾圧され勢力を失ったボン教徒たちが、仏教の経典や教理をボン教風に改変し、その経典を埋蔵したことを、十八世紀のゲルク派の宗義書『トウカン宗義水晶鏡』が伝えている。また、このような文献を埋蔵した者が、みずからテルトンすなわち「埋蔵経典発見者」として掘り出して、勢を得たともされる。これの記述はディクンパ（二一四三―二二〇七）の『ディクン・ゴンチク』からの引用であることが明らかにされており、ある程度はそのころのチベットの宗教事情を伝えるものであろう。

組織化されたボン教は、仏教と同様、僧院を中心とした形態を持つ。その中でも最も重要な寺院は、中央チベットのツァン地方にあるメンリ寺である。ここには十一世紀末にイェール・エンサカ寺というボン教の最初の本格的な寺院が建立されていたとされるが、一三八六年に起きた大洪水によって壊滅してしまう。その後、ギャロン出身で、エンサカ寺でも修行を積んだボン教の高僧ニヤムメー・シェーラプ・ゲルツェン（一三五六一―一四一五）が、エンサカ寺院跡に創建したのがメンリ寺である。一九五九年までボン教の総本山の地位を占め、往時は四つの大学堂、十二の僧坊、そしておよそ五百人の僧侶を擁していたと伝えられる。

メンリ寺の近くで、ヤルツァンポ河の下手に、一八七四年にユンドゥンリン寺が建立された。メンリ寺とならぶ有力寺院で、おもに論理学（ツェンニ）の学修が行われる学問寺として著名であった。メンリ寺の僧院長ソナム・ロトウの指示により、その弟子ダワ・ゲルツェンが新寺の創建にあたり、中央チベット最大のボン教寺院としてそ

の名を知られるようになる。

メンリ寺もユンドゥンリン寺も文化大革命時に徹底的に破壊されたが、一九八〇年代に入っていくつかの堂宇が再建された。往時の壮麗さを取り戻すことはできないが、その伝統は現在に至るまでかろうじて伝えられている。一方、一九六九年には第三十三代メンリ寺管長ケンチェン・ルントク・テンペー・ニマによって、インドのヒマールチャル・プラデーシユ州のソランに、メンリ寺の論理学堂ベルシエンテン・メンリリン寺も再建されている。<sup>21</sup>

## 二 ポン教のパンテオン

チベットの仏教寺院と同様に、ボン教の寺院の内部にはさまざまな神々が祀られている。あるものは釈迦や観音に似た柔和な姿を持ち、あるものは多面多臂、半裸で忿怒の姿で表されている。ボン教徒たちも壮大なパンテオンを有していることがわかる。しかし、その全体像はこれまでほとんど明らかにされていない。どのような神々がいるのか、名称は何であるのか、神々相互はどのような関係にあるのか、各尊の特徴や機能は何であるのか、神々のイメージは仏教の尊格のように、明確に規定されているのか。このような基本的な事項がほとんど知られていない。この小論ではボン教の神々に関する研究の足がかりとして、ボン教のパンテオンの全体像とそれを構成する神々を示したい。仏教パンテオンと対比しつつ、ボン教徒にとつての聖なるイメージを探ってみよう。

ボン教研究の第一人者であるP・クヴェルネ Kvaerne は、その著『チベットのボン教』(The Bon Religion of Tibet)を一九九五年に刊行している。現在のところ、本書はボン教の図像を本格的にあつかったほとんど唯一の研究書である。同書にはおよそ六十点のボン教の神々の作例が収録され、取り上げられた神々の種類もきわめて豊富である。

クヴェルネはこの中でボン教の神々およびその画像を次の六つのジャンルに分けている。

- (1) 寂靜尊 (peaceful deities)
- (2) 忿怒尊 (tutelary deities)
- (3) 護法神と土着神 (protectors and local deities)
- (4) 成就者、高僧、ダーキニー (siddhas, lamas and dakinis)
- (5) 説話図 (narrative thangka)
- (6) 生死輪廻図 (wheel of existence)

このうち、はじめの四つは神々の種類による分類で、あとの二つは画像の形式にもとづく。同書の分類にしたがいながら、それ以外の文献や作品も視野に入れつつ、ボン教の神々を以下に紹介しよう。

#### 寂靜尊

寂靜尊のはじめにあげられているのは「四至上尊」(Dber gshags tso bzhi) と呼ばれる以下の四尊のグループである。

サティク・エルサン (Sa ting er sangs)

シエンラ・オーカル (gShen lha 'od dkar)

サンポ・プムティ (Sang po 'bum khri)

トンパ・シエンラブ (sTon pa gshen rab)

これらの四尊は、順だヨム (yum) / ム (lha) / シーパ (srid pa) / トンパ (ston pa) という略称でも呼ばれる。「ト



図1 経典の挿絵に描かれた四至上尊  
 左上：サテイク・エルサン、右上：シェンラ・オーカル、  
 左下：サンポ・ブムテイ、右下：トンパ・シェンラブ

ム(母)という略称からもわかるように、はじめにあげられるサテイク・エルサンのみは女神で、他はいずれも男神である。これらの神々は単独でも信奉されるが、グループを構成して、四幅で一具のタンカに描かれたり、寺院に祀られたり、経典の挿絵に描かれたりする(図1)。持物や印相、身色を異にする点を除けば、四尊のあいだでその姿はきわめてよく似ている。

これら四尊の最後に位置するトンパ・シェンラブは、ボン教の開祖とみなされるシェンラブ・ミポチエのことである。ボン教徒にとっては歴史上の实在の人物であるが、実際は「最も優れたシェン」という意味にすぎない。シェンというのは古代チベットの氏族名もしくは職能集団の名称で、死者儀礼を司る者たちであったと考えられている。敦煌文書では、ポンポ(ボン教徒)と「シェンポ・パワ」(代表的なシェンの人, *gsten po pha ba*)は、同義で用いられている(山口 一九八八年、一六八頁、一九九一年、八六頁)。

「四至上尊」よりもさらに上位に位置する神にクントウ・サンポ(*Kun tu bzang po*)がいる。仏教の菩薩である普賢と同じ名称で、ニンマ派がたてる法身普賢と何らかのつながりが予想される。尊容も両者で共通である。ボン教のマンダラには、中央にクントウ・サンポを置き、この四方を四至上尊が取り囲むものがある(立川 一九九九年、一一一―一〇頁)。仏教のマンダラで、大日如来を四仏が取り囲む形式に、おそらく相当するのであろう。寺院内の尊像としても、クントウ・サンポと四至上

尊を配した構成が、スネルグロウヴによって報告されている。<sup>(5)</sup>

このほかにクヴェルネは以下のような神々をボン教の寂靜尊としてあげる。

シェーラプ・チャンマ (Shes rab Byams ma)

クンサン・アロル (Kun bzang a skor)

クンサン・ゲルワ・ドゥーパ (Kun bzang rgyal ba 'dus pa)

クンサン・ゲルワ・キャンシォ (Kun bzang rgyal ba rgya mtsho)

チメ・ツクブ ('Chi med gtsug phud)

ナムバル・ゲルワ (rNam par rgyal ba)

ティツク・ゲルワ (Knuti gtsug rgyal ba)

シェーラプ・マセン (Shes rab smra seng / smra bai seng ge)

このうち、ナムバル・ゲルワはトンパ・シェンラプの化身の一つで、「勝利者」を意味するが、筆者が調査した青海省のボン教寺院では、本堂の中尊として祀られていた(図2)。また、その左右にはシェーラプ・マセン(図3)とシェーラプ・チャンマ(図4)が置かれていた。さらに、シェーラプ・マセンを表したブロンズ像が寺院内の随所に安置されており、人気の高い尊格であることを窺わせていた。ティツク・ゲルワもトンパ・シェンラプの化身の一つで、悟りを開いた姿と言われている。

寂靜尊には複数の神で構成されたグループもある。「六人の教導のシエン」(dur bai gshen drug)は、衆生が輪廻する六つの世界(六趣)を司る神々で、以下の六尊で構成される。

サンワ・ガンリン (gsang ba ngang ring) 地獄

チベットのボン教における聖なるものの形

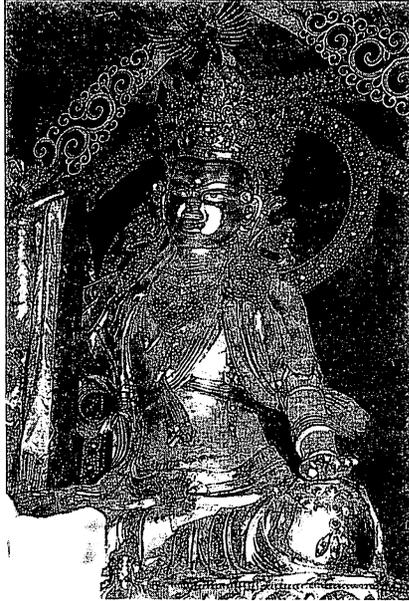


図2 ナムバル・ゲルワ (青海省ワンジャ僧院)



図4 シェーラブ・チャンマ  
(青海省ワンジャ僧院)



図3 シェーラブ・マセン  
(青海省ワンジャ僧院)

ムチヨ・テムドゥク (Mu cho idem drug) 餓鬼

ティサン・ランシ (Ti sangs rang zhu) 畜生

サンワ・ドゥーパ (gSang ba 'dus pa) 人

チェゲル・ワルティ (lCe rgyal bar ti) 修羅

イェシエン・ツクプ (Ye gshen gtsug phud) 天

これらの六神は、ボン教の「死者の書」とも呼ばれる『バルド・トェドル・セルゾウン・チェンチ』(Bar do thos grol gsal agron chen mo) にも登場し、実際の死者儀礼においても重要な役割を果たす。

死者儀礼とかかわりを持つ別の寂靜尊のグループとして「太古の十三シエン」(ye gshen dou gsum) がいる。その名称は以下の通りである。

イェシエン・ナムカー・パテンチエン (Ye gshen nam mkha' ba dan can)

イェシエン・キェンギ・ルツォン (Ye gshen khyung gi ru mtshon)

イェシエン・ゴキ・チャルダブチエン (Ye gshen rgod kyī 'phyar 'tab can)

イェシエン・マチエ・ダムガンチエン (Ye gshen rma bya'i ldarn rgang can)

イェシエン・ソウォ・ワルシエチエン (Ye gshen zo bo war shad can)

イェシエン・ウエルソ・ドゥンチエチエン (Ye gshen dbal so ndung dce can)

イェシエン・セーダー・ドゥンユクチエン (Ye gshen gsas mda' dung gyug can)

イェシエン・ガトン・リチエンパチエン (Ye gshen mga stong ri chen pa can)

イェシエン・シャンティ・ロナムダクチエン (Ye gshen gshang khri lo gnarn grags can)

イエシエン・ドゥンバルポ・バルチュエンチュエン (Ye gshen dung 'phar po 'phar chung can)  
 イエシエン・チェゲル・ゴシユチュエン (Ye gshen che rgyal rgod zhu can)  
 イエシエン・ヤンゲル・ドゥクタクチュエン (Ye gshen yang rgyal 'brug slag can)  
 イエシエン・チョパ・タラクチュエン (Ye gshen good pa khra slag can)  
 彼らは死者が死と再生のあいだに滞在する中有(バルド)の期間を司る神々である。<sup>(5)</sup>  
 寂靜尊の中には「十二儀軌」と称されるグループもある。<sup>(6)</sup> 十二尊で構成され、これらを対象とした儀礼の体系が、  
 重要な埋藏經典『シジ』(gzi brjid) に説かれている。十二尊の構成は以下の通りであるが、このうちの何尊かは  
 すでに単独尊として言及している。また、七番目のナムジョンのみは寂靜尊ではなく忿怒尊の姿をとり、十番目の  
 チャンマは女尊である。

- クンイン (Kun dbyings)
- ゲニエン (dGe bsnyen) あんげんナムダク (rNam bdag)
- チャムテン (Byans ldan)
- ドゥンロル (Dus 'khor)
- クンリク (Kun rig)
- ゲルワ・ギヤムツォ (rGyal ba rgya mtsho)
- ナムジョン (rNam joms)
- メンラ (sMan lha)
- ナムダク (rNam drag)



図5 十二儀軌の神々① (青海省ワンジャ僧院)

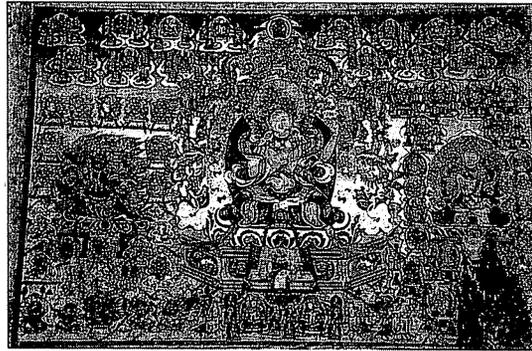


図6 十二儀軌の神々② (青海省ワンジャ僧院)

チヤンマ (Byams na)  
 モンラム・ターイエー (sMon lam mtha' yas) あるいはツェパメ (Tshe dpag med)  
 ドウルチョク (Dul chog)  
 ユンドウンリン寺のトンドル・ハカン内には十二儀軌の各尊を中尊とした十二のマンガラが描かれていることが報告されている(三宅 一九九九年、七七頁)。また筆者が調査した青海省のボン教寺院では、十二尊を三尊ずつ四幅に分けて描いたタンカが壁面を飾っていた(図5—8)。

**忿怒尊**

ボン教の忿怒尊として、クヴェルネは七尊をあげるが、そのうちの五尊は単独に信奉される他に「セー城の五最高神」(gsas mkhar mchog lnga) というグループを構成する。その内訳は以下の通りである。

ウェルセー・ガムパ (dBal gsas ngam pa) (図6)

ラゴ・トクパ (Ha rgod thog pa)

トウオ・ツォチョク・カーギン (Khro bo gts'o mchog mkha' gyi ng)

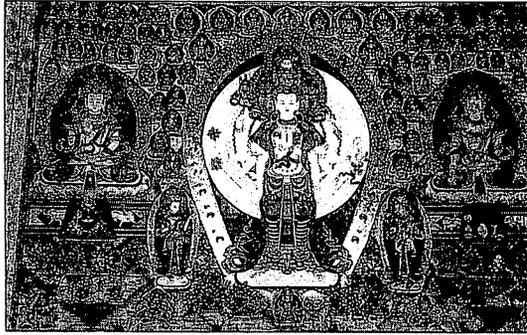


図7 十二儀軌の神々③ (青海省ワンジャ僧院)



図8 十二儀軌の神々④ (青海省ワンジャ僧院)

ブルバ (Phur pa)

ウエルチェン・ゲコ (dBal chen ge khod)

このうち、最後のウエルチェン・ゲコはゲコ・サンワ・ダクチェン (Ge khod gsang ba drag chen) あるいはドウドウル (bDud 'dul) という名称も持つ。さらに、この神を中心とする眷属尊として、配偶神ロクバル・ツァメ (Log bar tsa me)、両者の子どもクチ・マンケ (Ku byi nang ke)、またウエルチェン・ゲコの教えをはじめに説いた伝説の聖者アティ・ムヴェル (A ti mu wer) の名も、クヴェルネはあげる。

「セー城の五最高神」には含まれない忿怒尊に、マギュー・サンチョク・タルトウク (Ma rgyud gsang mchog thar tung) とメリ (Me ri) の二尊がいる。メリはメリ・サンワ・パーウォ・ギユプル (Me ri gsang ba dpa' bo gyud phur) あるいはウエルチェン・メリ (dBal chen me ri) の名で呼ばれることもある。

護法神・土着神

クヴェルネはこのグループの神として次

の六尊をあげる。

シーペー・ゲルモ (Srid pa'i rgyal mo)

シーゲル・デルマル (Srid rgyal drel dmar)

ニパン・セ (Nyi pang sad)

メンモあるいはメン・クマラツマ (sMan mo / sMan ku ma ra tsa)

アブセー (A bse)

タクバ・センゲー (Grags pa seng ge)

パンツェン (sPang tshan)

はじめのシーペー・ゲルモはシーゲルとも略される女神で人気が高い(図10)。「セー城の五最高神」の中の一尊ラゴ・トクパの配偶神ともみなされ、ナムチ・グンゲル (sKam phyi gung rgyal) という異称も持つ。また、メンモには、名前の一部に「メン」(sman) という語を含む八尊の眷属尊<sup>7)</sup>がいる。

筆者が調査した青海省のボン教寺院では、土着神堂 (bsan khang) に十六神の神々のタンカが掛けられていた<sup>8)</sup>。すでに言及した神も含まれるが、ボン教の護法神や土着神のまとまった資料として注目される(図11・12)。

### 成就者、高僧、ダーキニー

このグループは歴史上もしくは伝説の人物たちである。クヴェルネは次のような見出しをたてて説明を加えている。

タクラ・メバル (sTag la me bar / sTag lha me bar)

チベットのボン教における聖なるものの形

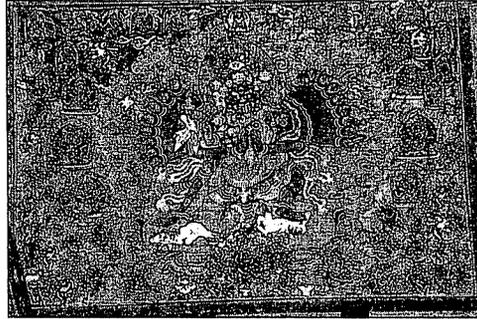


図9  
ウエルセー・ガムバ  
(青海省チュンゴ寺)



図10  
シーゲル・ウギヤ・チャクトン  
(青海省ワンジャ僧院)



図12 ダクツェン (青海省ワンジャ僧院)



図11 ムドゥ (青海省ワンジャ僧院)

タクラ・ワンチュク (sTag lha dbang phyug)  
サンワ・ドゥーパ (sSang ba 'dus pa)  
サンサ・リンツン (bzang za ring brsun)  
テンパ・ナムカー (Dran pa nam mkha')  
ツェワン・リクジン (Tshe dbang rig 'dzin)  
ニヤチエン・リシユ・タクリン (sNya chen li shu stag ring)  
ダーキニー (Dakinis)  
高僧 (Lamas)

はじめにあげられるタクラ・メバルについて、クヴェルネは「成就者と忿怒尊の二種類がある」というS・カルメイ (Karmay) の言葉を引きながらも、トンパ・シェンラプの弟子で、忿怒形をとることもある成就者名と説明する。ボン教の神々の中でもとくに人気の高い神のようで、作例が多く遺されている(図13)。

ダーキニーの作例としては、八世紀に生きたと伝えられるチョサ・ボンモ (Co za bon mo) の作例をあげている。また、高僧を描いた作品には、アムド出身の僧で、ナンシク寺の管長を務めたナムカー・ロドゥー (Nam mkha' blo gros) を中心に置き、その周囲に二十九の神や歴史上の人物を描いた作品が紹介されている。

高僧を描いたタンカは、チベットの絵画の中でも重要な位置を占め、チベット仏教の各派がそれぞれ多くの作品を伝えている。ゲルク派の歴代ダライラマやパンチエンラマのタンカ・セット、あるいはサキャ派の祖師像などは、その中でもよく知られている。ボン教の高僧図についての研究はこれまでほとんど手つかずの状態であったが、カルメイの近著(一九九八年)は、ボン教の基本的な文献『シャンシュェン口伝』(Zhang zhung snyan brgyud) を伝えた



図13 タクラ・メバル(青海省ワンジャ僧院)

八十七の人物を描いた作品を、詳細に研究した貴重な成果である。  
成就者については、インド仏教の有名な八十四成就者に相当する、八十人の成就者のグループが伝えられている。  
筆者が調査を行った青海省の二つのボン教寺院では、天井画として描かれた作例と、一幅のタンカに全員を描いた二種類の作品を確認した(図14・15)。両者のあいだで各人物の特徴は正確に一致しているため、下図となるような特定の図像集の存在が予想される。  
これらの寺院ではメンリ寺院の創建者であるニヤムメー・シェーラプ・ゲルツェンのツォクシン(集会樹)のタンカもあった(図16)。ツォクシンもチベット絵画独特の形式の一つで、仏教の各派がそれぞれ固有の作品を伝えている。ニヤムメーのツォクシンもこれらと共通の形式を持ち、樹木を背景としたニヤムメーの周囲に、無数の人物や神々の姿を描いている。

#### 説話図

ボン教の代表的な説話図には、トンパ・シェンラプの生涯を描いた作品があげられる(図17・18)。通常、十二幅のタンカで構成され、三宅(一九九九年、八三―八四頁)によれば次のような標記が付けられている。

- 一、(一) 生誕 (sKye ba bzhes pa)
- 二、教への宣布 (bsTan pa spel ba)
- 三、二種の衆生の教化 第一「トップの教化」(Gro gnyis 'dul pa I:

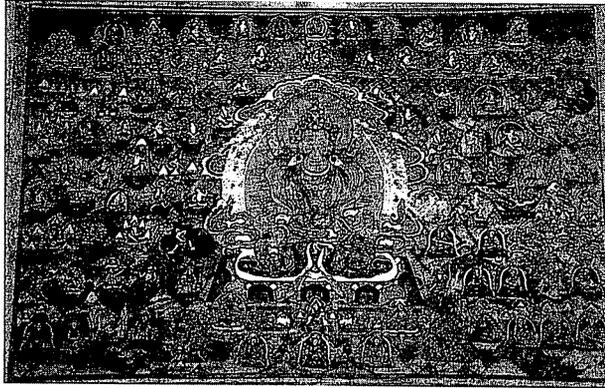


図14 八十成就者図（青海省ワンジャ僧院）



図15 天井に描かれた成就者（青海省チュンゴ寺）

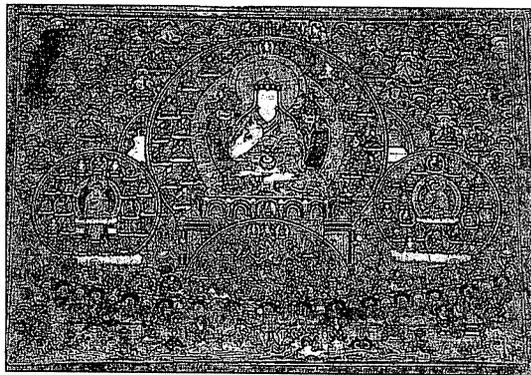


図16 ニヤムメー・シェーラブ・ゲルツエンのツォクシン  
（青海省チュンゴ寺）

チベットのボン教における聖なるものの形

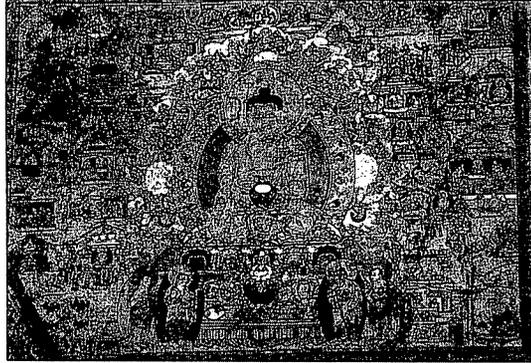


図17 トンパ・シェンラブの生涯① (青海省チュンゴ寺)

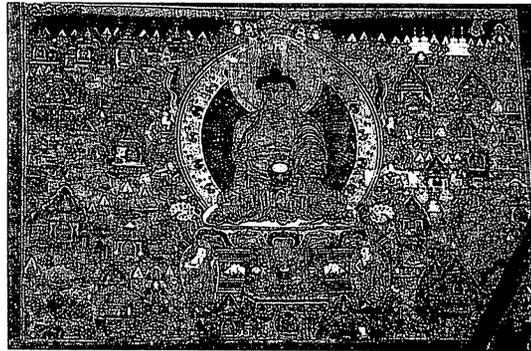


図18 トンパ・シェンラブの生涯② (青海省チュンゴ寺)

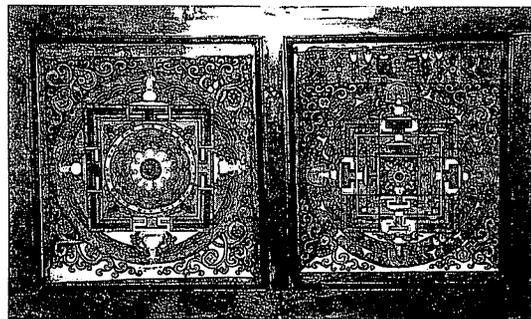


図19 ボン教のマンドラ (青海省チュンゴ寺)

gTo bu btul ba)

- 四、二種の衆生の教化 第二「食欲な女性の教化」(Gro gnyis 'dul pa 2: 'Dod chags can brsun mo btul ba)
- 五、結婚 (Khab bzhes)
- 六、令息化現 (Sras sprul)
- 七、衆生への利益 (Gro don mdzad)
- 八、マラーの教化 (bDud btul)
- 九、教えの設立 (bsTan pa bzhas pa)
- 一〇、出家 (Khyim spangs)
- 一一、輪廻の棄却 ('Khor spangs)
- 一二、涅槃のあり方の示現 (Mya ngan las 'das tshul bstan pa)

トンパ・シェンラプの生涯を描いた作品にいくつかの形式があり、これについてはクヴェルネ（一九八六、一九九五年）と三宅（一九九九年）にまとめられている。とくに、クヴェルネ（一九八六年）はパリのギメ美術館が所蔵する十幅のタンカに関する詳細な研究である。これらには言及されていない作品として、アメリカ合衆国の個人蔵の作品がインターネット上で公開されている。また、トンパ・シェンラプの生涯のいくつかの場面をあらたに白描で描き、チベット語の説明を加えた作品が、インドから出版されている (Mkhas grub rgya mtsho 一九七七年)。

トンパ・シェンラプの生涯を描いた作品以外に、ボン教の説話図に目立ったものはないが、例外的にメンリ寺の創建者ニヤムメー・シェーラプ・ゲルツェンの生涯をテーマにした作品が、クヴェルネによって紹介されている。

### 生死輪廻図

生死輪廻図あるいは六道輪廻図は、チベットの仏教絵画でもしばしば見られる主題である。巨大な車輪が六つの領域に等分割され、それぞれに六つの生まれ変わりの世界が描かれる。周囲の輪の部分には十二因縁が象徴的に表され、また中央の軸の部分には貪瞋痴の三毒が鶏などの動物の姿で表現されている。

ボン教の生死輪廻図も、基本的にはこれと同じ形式を持つが、十二因縁を象徴するものが仏教とは一致しない点と、六趣の各領域で衆生を救済する仏に代わり、「六人の教導のシエン」が登場する点が異なる。ボン教の生死輪廻図についても、クヴェルネが単独の論文を発表している（一九八二年）。

### マンダラ

ボン教徒たちも仏教徒と同様に数多くのマンダラを伝えている。近年、これらを集成した文献が刊行された（Tenzin nandak *et. al.* 二〇〇〇年）。全体で百三十一種のマンダラを数えるが、その内部は、資料の提供者であるテンジン・ナムダク氏によれば、以下の五つのカテゴリーに分類されている。

- 一、所作を浄化せしむる太古のボンなる乗 (Bya ba gtsang spyod ye bon gi theg pa)
- 二、一切の形相を具えたもの予見なる乗 (rNam pa kun ldan mngon ches kyi theg pa)
- 三、創造の慈悲の遊戯なる乗 (dNgos bskyed thugs rje rol pai theg pa)
- 四、完全なる利益を具えたもの究竟なる乗 (Shin tu don ldan kun rdzogs kyi theg pa)
- 五、その他

ボン教のマンダラはカトマンドウ市郊外や青海省のボン教寺院でも、天井などに描かれ、寺院の装飾としても用

いられている(図19)。これらのマンダラはいずれも、神々を丸や点のみで表し、具体的な尊容を描かない。日本密教の用語を借りれば三昧耶形のマンダラに相当するが、全体の印象はそれよりもはるかに簡略で、ヒンドゥー教のヤントラにむしろ類似している。

マンダラを四つのグループに分類する発想は、チベット仏教がタントラの四階梯にしたがってマンダラを四分することに似ているが、仏教とボン教とのあいだで用語の一致は見えない。また、ボン教のマンダラの名称の多くは、マンダラを中心におかれた神の名称で、この小論ですでに取り上げた神々もその中かなり含まれている。百三十一種のマンダラの内容と順序は、これらの神々の相互の関係、系統、機能などと関連していると考えられる。マンダラの全体像を知るとは、ボン教の神々の体系を知る上で重要となるであろう。

### 三 ポン教徒は何を取り入れたか？

ボン教の神々の姿から受ける印象が、仏教のそれにきわめて近いことは否めない。仏教とボン教のイコノグラフィーについて十分な知識を有しないものには、両者を判別することさえ困難であろう。それでは、両者のあいだで何が共通なのであろうか。言いかえれば、ボン教徒たちはみずからの聖なるものたちの姿を構築するために、仏教から何を取り入れたのだろうか。

#### パンテオンの構造

前節で示した寂靜尊・忿怒尊という二分法は、前出の『死者の書』などでも見られ、ボン教徒自身が有する尊格

の分類法である。これはチベットの仏教徒もしばしば用いるものであるが、とくにニンマ派の経典や儀軌類に頻繁に登場する。現在見られるボン教が組織化されたのは、ちょうどニンマ派が教理や儀礼を整備していった時期に重なる。神々の体系が両者で共有されていたとしても不思議はない。しかし、寂靜尊・忿怒尊の各グループの内部は、仏教とボン教のあいだで必ずしも類似するものではない。

ボン教の開祖トンパ・シェンラブは、釈迦をモデルとしておられるとしばしば説明される。しかし、トンパ・シェンラブを含む「四至上尊」に相当するものは仏教には存在しない。マンダラでの配置などから、仏教の四仏に対応するようにも見えるが、四仏が四方の仏国土の仏であるのに対し、ボン教の四至上尊はこのようなコスモロジーを前提としない<sup>13</sup>。また、至上尊のはじめにあげられるサテイク・エルサンは男尊ではなく女尊で、その尊容は仏教の般若波羅蜜によく似ている。

六人の教導のシェン、太古の十三シェンは、「シェン」を「仏」に置きかえれば、六道の衆生を救済する六仏や、過去仏に対応するかもしれない。これらの複数のシェンたちは、外見上はほとんど違いはなく、持物のみによって区別されている。太古の十三シェンは持物そのものが名称として用いられている。このように、個々の神々の個性を極力排除し、シンボルとしての持物（すなわちアトリビュート）を重視するのは、インド密教においても一般的である。人為的なシンボル体系を基盤にした画像形式のシステムは、おそらく仏教からボン教が学んだものである。四至上尊のサテイク・エルサンや、ターラーに似た姿のチャンマを除くと、女神はほとんど登場しない。仏教パントオンの女神は、四明妃のように特定の男尊の配偶神とみなされる尊格が数多くいるが、ボン教の寂靜尊で、男神と女神が一組のものとして扱われるものは見あたらない。また、仏教の女尊の中にはマハーマーユリーや仏頂尊勝のように、



図20 クンサン・ゲルワ・ドゥーバ  
(青海省チュンゴ寺)

陀羅尼信仰と結びついた重要な尊格がいるが、これに該当するものもボン教にはない。

シエーラブ・マセン、クンサン・アコル、クンサン・ゲルワ・ドゥーバ(図20)などの姿は、仏教の菩薩を強く意識している。しかし、これらの神に対して「菩薩」に匹敵する総称をボン教徒たちが用いていたかどうかはよくわからない。仏教徒が有する仏、菩薩、女尊のような、パンテオンのヒエラルキーにもとづく分類は、ボン教徒には認められない。

寂靜尊に分類されていた十二儀軌のグループも、重要なボン教の神々である。しかし、その中には忿怒形をとるナムジョンや、女神のチャンマも含まれる。十二儀軌の神々は、仏教の八大菩薩や賢劫十六尊のような均質な菩薩で構成されたグループとは異なるのである。

ボン教の忿怒尊は、尊容の上では仏教の無上ヨーガ・タントラ系の守護尊と強いつながりを見せる。多面多臂で武器を持ち、明妃を抱いたまま立ち、足の下には異教の神をしばしば踏む。仏教のパンテオンにおいて、守護尊は仏と同等あるいはそれ以上の地位を占めるが、そのために特定の仏との団体関係を強調する。これは日本密教での明王の扱いにも通じ、不動と大日、大威徳と文殊のような対応がよく知られている。忿怒というイメージが、慈悲や救済、あるいは戒定慧といった仏教の基本的な理念と相容れないことを正当化するための教理上の操作と言える。そのような手続きを必要としないボン教では、忿怒尊は寂靜尊とは別個のグループを形成し、両者のあいだに対応関係を設定することも求められなかったであろう。

ボン教の護法神や土着神は、必ずしもチベット固有の神々ではなく、インド起源や中国から伝わったと考えられる神々もいることが、名称や尊容から推測できる。仏教の場合、インドラをはじめとする護方神のように、ヒンドゥー教の神々のグループをそのまま導入したケースや、アスラ、ナーガ、ヤクシャなどのように、古くからインドに伝わる民間信仰の神々がパンテオンの一角を占めるが、ボン教では、まとまった形でこれらの神々が現れることはない。<sup>(14)</sup>

歴史上の高僧や伝説のテルトンなどがボン教固有の者たちであるのは当然であるが、ボン教図像のかんりの作品の主題に、これらの人物が選ばれること自体は、チベット仏教美術と共通している。十六羅漢や八十人の成就者なども、仏教に共通である。インド密教の場合、このような歴史的な人物や行者たちが造型表現されることはない。基本的にインドの密教美術は、歴史や説話を図像表現することにほとんど関心を向けなかった。伝説も含め歴史上の人物を描くことをチベット人が好んだことは、特定の宗教の伝統と見るよりも、この国の文化的土壌をその背景に考へるべきであろう。

### イメージと名称

ボン教の神々のいくつかは、図像上のモデルを仏教の尊格に見いだすことができる。これまでに取り上げた神々の中でも、次のような例をあげることができる。

#### 〔仏教〕

#### 〔ボン教〕

釈迦

トンパ・シエンラプ

十一面観音

クンサン・ゲルワ・ドゥーパ

文殊（アラバチャナ文殊）

シエーラプ・マセン

般若波羅蜜

サティク・エルサン

ヘーヴァジユラ

マギュー

ツォンカバ

ニヤムメー・シエーラプ・ゲルツェン

はじめにあげた釈迦とトンパ・シエンラプの場合、いずれもその生涯の重要なシーンを描いた説話図があるという、主題上の共通点もあげられる。釈迦の場合、その身体的特徴が「仏の三十二相八十種好」としてインドにおいてまとめられ、仏像制作の重要な指標になったが、トンパ・シエンラプにも類似の「三十二相八十種好」があることも明らかにされている（御牧 一九九九年）。両者のあいだでは共通するものが多く、ボン教徒による借用であることは容易に推測できるが、相違点にボン教固有のイメージを見ることがもできる。

メンリ寺の創建者ニヤムメーとツォンカバは、ほぼ同時代に活動をし、いずれも後世のボン教あるいは仏教の重要な基礎を築いた人物である。図像学的に単に似ているというよりも、それぞれの宗教における重要性が共通しているとも言えよう。彼らを中心としたツォクシンが存在することも、ゲルク派や現在のボン教が彼らを宗祖と仰ぐことから当然である。

一方、名称においてもボン教と仏教のあいだには類似したものが数多くある。たとえば、次のような例である。

〔仏教〕

〔ボン教〕

クントウ・サンポ (Kun tu bzang po)

普賢

チャンマ (Byams ma)

弥勒 (Byangs pa)

マギュー (Ma rgyud)

母タントラ

サンワ・ドゥーパ (gSang ba 'dus pa)

秘密集会 (グヒヤサマージャ)

ダウンコル (Dus 'khor)

時輪 (カーラチャクラ)

マワエー・センゲ (sMra dai seng ge)

文殊の異名

ツェーパメ (Tshe dpag med)

無量寿

シェルチン (Sher phyin)

般若波羅蜜

このうち、はじめのクントウ・サンポは、すでに述べたように、ニンマ派の法身普賢に相当する尊格と考えられる。マングラの中尊となり、「四至上尊」の上位におかれたり、タンカで中心に描かれる尊格の上の方に小さく表されることも、この尊が仏教の法身に相当する存在であることを示している。

この他の対応を見ると、仏教とボン教とのあいだに、ある種の「ずれ」があるように思われる。たとえば「チャンマ」は弥勒を表す「チャンパ」の女性形であるが、その尊容はターラーに似た女尊である。サンワ・ドゥーパは秘密集会を意味するが、実際にこの名称を冠する二尊は十一面観音に似た神である。ボン教徒たちは神々のイメージも名称も仏教のものを借用しているが、その両者を同時に模倣することは、たくみに避けているのである。いずれか一方をずらすことによって、ボン教徒としてのオリジナリティーを保とうと見ることができると見ることができる。

#### 四 おわりに

ボン教のパンテオンの全体像と、仏教図像とボン教図像との関係を見てきた。仏教と同様、ボン教にも視覚化され、造形化される聖なるイメージがある。ボン教がこのような図像作品を有するようになったのは、現在のボン教

に直接つながる「組織化されたボン教」の時代になってからであろう。それ以前のボン教徒たちは、特定の神々への信仰は有していても、おそらくそれを視覚化することはなかったと考えられている。聖なるものがイメージを有しないことは、古代インドのヴェーダの宗教や、わが国の神道においても同様であり、ユダヤ教やイスラム教における偶像に対する否定的な態度にも通じる。

ボン教のパンテオンの全体的な構造には、寂靜尊・忿怒尊という二つのカテゴリーが基本にある。これは仏教のニンマ派などにも見られるが、それぞれのカテゴリーの内部は、仏教とボン教徒のあいだで一致を見ない。とくに、グループを構成する神々を見た場合、仏教では同一のヒエラルキーに属する均質なメンバーで構成されるのに対し、ボン教では「四至上尊」や「十二儀軌」の神々のように、イメージや性別の差異を超えて、まとまりをもつ。ボン教のパンテオンに厳密な意味でのヒエラルキーそのものがあるかどうかとも疑問である。

神々の具体的なイメージと名称を見ると、仏教の影響は誰の目にも明らかである。しかし、ボン教徒はこの両者をひとつの神に同時に適用することは、注意深く避けている。いずれか一方をボン教独自のものにしたたり、別々の仏教の尊格からそれぞれを借用するという「ずらし」によって、独自のアイデンティティーを維持しようとしたのであろう。

ツォクシンや仏伝図(ボン教では「ジェン」伝図)のように、仏教の画像形式がそのままボン教の画像にも認められることもある。また、祖師の血脈を描くことや、法身のような根源的な神格をタンカの画面の上部に描くなど、画面構成の原理も共通する点が多い。これらは、実際に作品の制作にあたったものが、おそらく仏教画像とボン教画像の両者を扱ったことにも関連するであろう。また、ツォクシンのように、特定の宗教実践と結びついた形式の場合、ボン教と仏教とのあいだの実践方法の共通性も視野に入れなければならない。

この小論ではボン教のパンテオンの全体像を、仏教のそれと対比して見てみたが、それはボン教の神々の図像学的考察の端緒に過ぎない。次の段階として、個々の神のイメージの特定、そこに見られるボン教独自のモチーフの解明、典拠となる文献の読解などが必要とされる。

## 註

- (1) ボン教の歴史については山口(一九八八年、一四九—一六七頁、一九九一年)にくわしい。この段落の内容もこれらによる。
- (2) ボン教の寺院の歴史と現況については三宅(一九九九年a、一九九九年b)参照。
- (3) スネルグロヴ(一九八一年、七三—八〇頁)。スネルグロヴが報告する北西ネパールのボン教寺院については、後に氏が再調査を行っている(一九七六年)。
- (4) 同書についてはラウフ(一九九四年)参照。
- (5) 太古の十三シエンと死者儀礼についてはKværne(一九八五年)参照。
- (6) 十二儀軌の神々に関するKværne(一九九五年)の説明は簡略である(同書三六一—三七頁)。これらの神々についてはDerwoodが短い論考を発表している(一九八三年)。
- (7) ガンメン(Nag sman) / ガンメン(Gang sman) / ヤーメン(Ohu sman) / トーメン(mThos sman) / ドリンメン(Do gling sman)の八尊。クウェルネによれば「メン」というのは古代チベットにおいて、ある種の女神を指す語であったと見う。
- (8) チャンメン(Dre'u dmar mo) / ナウ・ナクモ(Dre'u nag mo) / チェンラ(gCen lha) / シンツェ(gShin tje) / プ・ゲル(rMa rgyal) / ムドマ(dmU bdud) / タタシエン(Brag bisan) / トゥンテン(dMag dpon) / ナトラ(gNan lha) / タムチエン(Dam can) / シェルタブ・チエン(Shel khraḥ can) / ニパン・セ(Nyi pang sad)の十六神。図版は拙稿(二〇〇〇年、図8—95)参照。

- (9) 森(二〇〇〇年、一〇、一八一―二二頁、図12、102―119)に全図掲載。
- (10) 森(二〇〇〇年、図11、23)にも掲載。
- (11) <http://www.himalayanart.org> 作品番号二〇〇〇一八一―二〇〇〇二四。
- (12) 写真図版は立川(一九九六年、七八―八〇頁)、森(二〇〇〇年、図102、103)参照。
- (13) カルメイ(一九八七年、三七―一頁)は四至上尊のうちのシェンラ・オーカルとサンポ・ブムテイについて、トンパ・シェンラブの任務遂行を援助する神と説明する。四至上尊のあいだでヒエラルキーの上下や分業関係があることがわかる。
- (14) ただし、ボン教の経典『十万白竜』には「サタク sabdag」と「ルキ」という土着神のグループが現れる。語義からすれば、前者は土地神、後者は龍神に相当する。これらのグループについては、スネルグロウヴとリチャードソン(一九九八年、五七頁)もチベット古来の地方神として説明を行っている。『十万白竜』は寺本婉雅によって、はやくも明治三十七年に翻訳されている(寺本 一九〇六年)。

#### 参考文献

- Denwood, P. 1983 Notes on Some Tibetan Bonpo Rituals. In P. Denwood and A. Platigorsky eds., *Buddhist Studies Ancient and Modern*, Collected Papers on South Asia No. 4, London: Curzon Press, pp. 12-19.
- Karnay, S. G. 1998 *The Little Luminous Boy: The Oral Tradition from the Land of Zhangzhung depicted on two Tibetan paintings*. Bangkok: White Orchid Books.
- Karnay, S. G. & Y. Nagano eds. 2000 *New Horizons in Bon Culture in Tibet*, Senri Bon Studies 2, Ethnological Reports 15, National Museum of Ethnology.
- S・G・カルメイ 一九八七年「ボン教」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』冬樹社 三六四―三八八頁。
- Kværne, P. 1982 A Bonpo Version of the Wheel of Existence. *Melanges Chinois et Bouddhiques* 20: 274-289.
- Kværne, P. 1985 *Tibet Bon Religion, A Death Ritual of the Tibetan Bonpos, Iconography of Religions*, Institute of Religious Iconography State Univ. Groningen, Leiden: E. J. Brill.

- Kværne, P. 1986 *Peintures tibétaines de la vie de sTon-pa-gyen-rab*. *Arts Asiatiques* 51: 36-81.
- Kværne, P. 1995 *The Bon Religion of Tibet: The Iconography of a Living Tradition*. London: Serindia.
- Mkhas grub rgya mtsho (compiled) 1977 *The Illustrated Life of Mi-bo gSen-rab*. Dolanji: Tibetan Bonpo Monastic Centre.
- Tenzin Namdak, Y. Naganno & M. Tachikawa 2000 *Mandalas of the Bon Religion*. *Bon Studies* 1, Senri Ethnological Reports 12. Osaka: National Museum of Ethnology.
- D・スネルグロヴ 一九八一年『ヒマラヤ巡礼』吉永定雄訳、白水社。
- D・スネルグロヴ、H・リチャードソン 一九九八年『チベット文化史』奥山直司訳、春秋社。
- D・I・ラウフ 一九九四年『ボン教の死者の書』奥山直司訳『ユリイカ』二六(一三)、一〇四―一五頁。
- 御牧克己 一九九九年「仏教の仏陀とボン教の師シェンラブ・シポの32の身体的特徴」長野泰彦編『チベット文化域におけるボン教文化の研究』(平成八―十年文部省科学研究費補助金国際学術研究・学術調査研究成果報告書) 一―一〇頁。
- 立川武蔵 一九九六年『マンガラ 神々の降り立つ超常世界』学習研究社。
- 寺本婉雅 一九〇六年『十萬白龍』帝國出版協會。
- 長野泰彦編 一九九九年『チベット文化域におけるボン教文化の研究』(平成八―十年文部省科学研究費補助金国際学術研究・学術調査研究成果報告書)。
- 三宅伸一郎 一九九九年a「ボン教寺院訪問記」『とんぼ』三、一五―三九頁。
- 三宅伸一郎 一九九九年b「中央チベットのボン教寺院およびアムド・シャルコク地方ボン教寺院の現状について」長野泰彦編『チベット文化域におけるボン教文化の研究』(平成八―十年文部省科学研究費補助金国際学術研究・学術調査研究成果報告書) 七―一〇四頁。
- 森 雅秀 二〇〇〇年「青海省同仁県のボン教寺院」『高野山大学密教文化研究所紀要』一三、一―八六頁。
- 山口瑞鳳 一九八八年『チベット(下)』東京大学出版会。
- 山口瑞鳳 一九九一年「ボン教の成立と変遷」(ネパール ボン教の生き残る村)『季刊民族学』一五(四)、八五―八九頁。